

報告・資料

箱庭作品の特徴およびイメージの諸相と不安との関係

遠藤 歩*・安保 英勇*

The relationship between aspects of Sandplay creations and anxiety

Ayumu Endo*, Hideo Ambo*

Abstract

This paper discusses “the basic features” and “the type of the image” of the sandplay creations by focusing on makers' anxiety. For this purpose, the creations made by a low-anxiety group ($N=31$) consisting of university students and a high-anxiety group ($N=22$) consisting of psychiatric outpatients were compared. As a result, in “the basic features”: “the number of miniature”, “the kinds of miniatures”, and “the theme of the creation”, there is little practical difference between the two groups. Regarding “the type of the image”, as long as their anxiety is manageable for them, makers tend to express their “external image” in their works when their ego functions defensively, and “fantastical image”, when regressively. However, when high anxiety disturbs their ego functioning, their works assume the character of “conflictual image.” It is a useful viewpoint on “the type of the image” for understanding client's anxiety.

Key words : sandplay creation, anxiety, type of image.

問題と目的

箱庭療法とは、砂とさまざまなミニチュアを用いて内的世界を表現し、その過程で意識と無意識の統合をはかる心理療法である。本邦への導入当初は、チックや緘黙、不登校などの子どもの問題への適用が中心であったが、今日では、心因の精神疾患をはじめ、内因、外因の精神疾患、問題行動や自己分析など広範囲にわたり、幼児期から成人後期までの適用されるようになった（遠藤，2010）。箱庭療法においては、セラピストは、制作者の人格をケアし、人間がもつ自己治癒力の活性化を促す。こうしたヒューマニスティックなア

プローチであることが、箱庭療法の適用範囲が拡大した理由と思われる。

この発展は、個を重視する事例研究による積み重ねの結果であるが、そこでは制作者のパーソナリティ、環境、困難、体調など多様な要因を総合的に捉えており、どの要因がどのような表現に結びついているのか類型的に論じられることはなかった。他方、基礎的研究では、精神疾患の有無、精神発達の程度、性格など特定の要因に焦点を当て検討されてきた。その主な目的は、ある要因を持つ制作者の作品の特徴について基礎資料を提出すること、並びに、制作者のある要因と作品の特徴との相関的関連性の分析から、その要因を判別

* 東北大学 (Tohoku University)
受稿2011.9.10 受理2012.4.2

する指標として、作品の特徴の有用性を検討することであった。そして、特定の要因について、さまざまな知見が報告されてきた。

ところで、現代社会は“不安の時代”と言われるように、気分が時代を表すほど、人間の不安が増大している。不安は、人間の行動やQOL（Quality of Life）に大きな影響を及ぼす要因である。臨床的現実の観点からいえば、不安は、精神医学、臨床心理学全体をカバーするキーワードの一つであり、ほとんどすべての病態において一部あるいは過半の病像を占めており、治療過程では、必ず患者における不安の問題が登場してしまふ（清水, 1994）。前述したように、箱庭療法は、臨床現場に普及しているが、不安に焦点を当てた研究は乏しい。これまで、高不安の制作者の作品に対して抱く印象について検討されているが（遠藤, 2012）、作品そのものについては検討されていない。不安は重要な心的特性であり、不安を研究対象とすることは、臨床実践からの要請に沿うものである。

そこで、本研究は、基礎的研究法を用いて、不安という要因に焦点を当て、作品との関係について検討してゆく。従来、基礎的研究において、もっとも取り上げられた作品の特徴は、“ミニチュアの数”、“ミニチュアの種類”、“作品のテーマ”であり、これらは作品の基本的な分析方法となっている^{註1}。その方法について以下に概観してゆく。

“ミニチュアの数”は、砂箱に置かれたミニチュアの個数で、基礎資料としての報告が中心であった。要因との関連性を論じた研究では、ロールシャッハ・テストにおける反応数の解釈仮説を背景に、“ミニチュアの数”が知的生産性や想像力の指標になり得るか検討されてきた（木村, 1981；宮川, 2004）。だが、研究によって結果が示

唆するものは異なっており、明確な見解は得られていない。

“ミニチュアの種類”は、ミニチュアの持つ属性によって分類するものである。“植物系”、“動物系”、“人間系”、“建造物・人工物系”、“交通系”という属性を基本分類とし、研究によっては下位分類（e.g., “宗教系”）を設定し、種類別にミニチュアの数を検討するものである。“ミニチュアの数”同様、基礎資料としての報告が多い（e.g., 岡田, 1981）。また、ミニチュアの数が多かった種類と制作者の要因を、分析心理学的解釈（以下、解釈）によって結び、制作者の内的世界を推し量ってゆこうとする。

臨床実践において扱われる作品のテーマとは、継続的に作られた一連の作品から自ずと見出される、制作者と関連深い表現である（河合, 1969）。一方、基礎的研究における“作品のテーマ”とは、作品を共通の表現によってまとめたものであり、そのまとまりと、制作した人々に共通する要因との関係を検討することで、知見を見出そうとしてきた。この共通の表現とは、作品の“表現形態”によって分類され（佐藤・平松, 1987）、“家・庭・公園”、“町・村”、“郊外・牧場”、“自然・ジャングル”、“つどい・おとぎの国”、“戦い”、“動物園”、“その他”の八つ（木村, 1985）が用いられることが多い。そして、特に多く分類されたテーマと制作者の要因を、解釈によって結び、理解してゆこうとする。佐藤・平松（1987）は、“表現形態”で分類するには限界があることを指摘し、これまで取り上げられてきた解釈を参考に、解釈的分類カテゴリーを作成した。そして、作品の“表現内容”から、“安定・平和・風景”、“出立・渡河・探訪・回帰”、“旅”、“戦い・対立・葛藤・迷い・自己への沈潜”、“異次元”、“可能性の萌芽”、“その他”のいずれかに当てはめて解釈し、作品を分

註1 いくつかの研究では、制作時間・初発時間・砂の使用といった制作行動に関する指標も合わせて検討されているが、本研究では、作品に関する指標に限定する。

類する方法を提案した。

先行研究では、これらの特徴の分析は、一定の結果を提出してきたが、治療実践とギャップがあることが指摘されている（弘中, 1987）。作品を分類する際に生じるギャップの要因として、“表現形態”による分類のように、制作者の心的活動を考慮していないことや、“表現内容”による分類のように、探索的に構成したのではなく、既存の解釈の枠組みに、画一的に当てはめようとしたことが挙げられる。

箱庭療法の基本仮説では、作品は、制作者の意識と無意識、内界と外界の交錯する領域に生じたイメージであり（河合, 1969）、制作者の心的活動の影響を受け、箱庭表現は変化すると考えられている。従来、この心的活動と箱庭表現の関係については、事例研究法で個性記述的に捉えられてきたが、その中で、類型的に捉えられることも示唆されてきた。例えば、河合（1969）は、制作者の心的活動が防衛的であれば、内的なものに関連の少ない作品となり、適度な退行が生じれば、より内的なものに関連が深い作品になることを報告している。こうした心的活動を考慮し、探索的手法によって作品の類型を見出すのであれば、臨床と研究のギャップをわずかでも埋めることができると考えられる。

そこで、本研究では、“ミニチュアの数”、“ミニチュアの種類”、“作品のテーマ”の基本的特徴の分析、および、制作者の心的活動を踏まえ、探索的に作品を分類する“イメージの類型”の四つの指標について、不安との関係を検討してゆく。不安の要因については、制作者を、精神科に通院する不安の強い患者により構成される臨床群と、不安の低い健常な大学生・大学院生により構成される学生群の二群を設定し、両群を対比することで検討してゆく。

方 法

箱庭制作者

大学生・大学院生31名（男性16名、女性15名、 $M = 22.4$ 歳（ $SD = 2.0$ 歳）：学生群）と、精神科医療機関のAクリニックに通院し、精神科医から制作が可能と判断された患者22名（男性7名、女性15名、 $M = 25.7$ 歳（ $SD = 3.4$ 歳）：臨床群）。臨床群は不安障害の患者を主な制作者とした。一部に、解離性障害、強迫性障害、摂食障害、パーソナリティ障害、適応障害、抑うつ状態等の診断を単一、または複数受けている患者が含まれた。両群とも箱庭療法に関する専門的な知識、訓練経験を有している人は制作者の対象としなかった。

質問紙

学生群に対して、精神疾患のスクリーナーであるK10（古川・大野・宇田・中根, 2002）を実施した。K10は10項目、5件法の尺度で、その得点は10－50点の範囲を取り、25点以上で精神疾患の検出が期待できる。学生群のscore rangeは10－23点（ $M = 14.7$ 点、 $SD = 3.5$ 点）であり、精神的に健常な大学生であることを確認した。

また、両群に対して、状態－特性不安尺度（State-Trait Anxiety Inventory：STAI）の日本語版（肥田・福原・岩脇・曾我・Spielberger, 2000）を実施した。STAIは特性不安尺度と状態不安尺度から構成され、それぞれ20項目、4件法の尺度であり、素点は20－80点の範囲を取る。特性不安では、学生群の平均素点は40.5点（ $SD = 6.1$ 点、score range = 30－48点）、臨床群の平均素点は62.1点（ $SD = 7.7$ 点、score range = 48－77点）であった。 t 検定の結果、群間に有意な差が認められた（ $t(51) = 11.39, p < .05$ ）。状態不安では、学生群の平均素点は35.8点（ $SD = 5.1$ 点、score range = 23－44点）、臨床群の平均素点は47.8点（ $SD = 11.2$ 点、score range = 25－77点）であっ

た。 t 検定の結果、群間に有意な差が認められた ($t(27.16) = 4.72, p < .05$)。不安の観点から、群間の特性上、状態上の差を確認した。

制作手続き

本調査は、Aクリニックの箱庭療法用具が備わっている一室で実施した。箱庭制作は個別に行い、すべて第一筆者が立ち会った。まず、本調査について説明し、同意が得られた場合に質問紙を実施した。制作者の状態を確認した後、“ここにあるミニチュアや砂を使って、砂箱に何かを作ってください。作り終わったら教えてください。それでは、始めてください”と教示し、制作が開始された。時間は制限せず、開始の合図から制作者による終わりの合図が出されるまで行った。制作中、第一筆者は箱庭療法の基本的態度に準じ、制作の流れを妨げないように受容的、共感的であろうと努めた。作品完成後、制作者の体調を確認し、作品の説明を求めた。

倫理的配慮

制作者に対し、個人情報保護すること、研究への参加は強制でないこと、いつでも制作を中止してよいこと、中止による不利益はないこと教示し、同意を得て実施した。また、体調の不調を訴えた場合は、精神科医、臨床心理士が対応するよ

うに準備を整えた。

分析手続き

基礎的特徴の分析 制作手続き終了後、作品を写真に撮り、砂箱内に置かれたミニチュアの数やその種類など基礎的特徴に関するデータを収集した。“ミニチュアの数”は、データを元に集計した。

“ミニチュアの種類”は、岡田(1981)を参考に、基本分類である“植物系”、“動物系”、“人間系”、“建造物系”、“交通系”、“その他”の六つとし、属性に基づき第一筆者が分類し、分析した。

“作品のテーマ”は、木村(1985)による分類を参考に、該当する作品がなかった“動物園”を除き、“家・庭・公園”、“町・村”、“郊外・牧場”、“自然・ジャングル”、“つどい・おとぎの国”、“戦い”、“その他”の七つとした。

“作品のテーマ”は、作品(画像)の表現や作品へのコメントを考慮し、第一筆者、第二筆者が協議の上、分類した。

イメージの類型の分析 本研究では、制作者の心的活動を考慮し、探索的な手法によって、“イメージの類型”について検討することを目的の一つとしている。“イメージの類型”を見出すにあたって、制作者による作品への説明や語りをデータとすることで制作者の心的活動を考慮に入れ、質的方法を採用することで探索的に行うことにし

Table 1 イメージの類型とその操作的定義

性質	操作的定義
外的イメージ	現実に存在する物や場所など具体的な事物を基にしたイメージ。作品に情緒的体験が投影されることは少ない。
理想的イメージ	願望、好ましいもの、心地よいもののイメージ。制作者は、喜びや安心といった快感情をもつことが多い。
葛藤的イメージ	葛藤、問題、困難のイメージ。制作者は、不安や恐怖といった不快感情をもつことが多い。
幻想的イメージ	一定程度の統合性を有した、想像上あるいは架空のイメージ。作品には、ストーリーが付与されたり、情緒的体験が投影される場合が多い。
抽象的イメージ	統合性が乏しく、抽象的で、了解困難なイメージ。

た。質的方法は、よく知られていない事象について、それに関わる人の内的体験の意味や基本的構造を把握することを目的とする (Creswell, 1994) ものであり、本研究で用いることは妥当と考えられた。

質的研究の方法として、質的コード化 (Coffey & Atkinson, 1996) の手法を援用した。この手法は、データに即したカテゴリーを生成する質的分析の一つであり、既存の枠組みではなく、データからボトムアップ式にカテゴリーを生成し、分析に用いるものである。手続きとしては、まず、データの内容や特徴を捉え、適宜ラベルを付ける。次に、データ間でのラベルの比較を行ない、各々の類似性と相違性からラベルを整理し、カテゴリーを生成してゆく。そして、生成されたカテゴリーは、再びデータに立ち戻り、検討と修正を繰り返し行うことによって、データに即したカテゴリーの生成を目指すものである。

以下に、本研究でとった“イメージの類型”のカテゴリー作成の手続きを示す。(a) 制作後に求めた説明をテキスト化し、数回読み、内容を把握した。(b) テキストデータから、作品の全体あるいは一部が表しているもの、意味づけ、精神活動、情緒的体験に対しラベルをつけた。(c) 制作者のコメントとその制作者の作品 (画像) を照合し、整合性を確認し、不適切なラベルは修正した。(d) ラベルをつけたデータを比較し、類似性と相違性に基づいて分類し、カテゴリーを生成した。作成したカテゴリーは、常に他のカテゴリーと比較し、精緻化を繰り返した。(e) 各カテゴリーのラベルの意味内容を集約し、イメージの類型を同定した。結果、“外的イメージ”、“理想的イメージ”、“葛藤的イメージ”、“幻想的イメージ”、“抽象的イメージ”の五つが抽出され、それぞれを定義した。Table 1 に“イメージの類型”の定義を示す。

(f) 定義に従い、作品を分類した。その際、複数のカテゴリー間にまたがっている作品は、該当

するカテゴリーすべてに分類した。以下に、各カテゴリーの典型的作品と制作者の説明の概要を記す (Figure 1 - 5)。

結 果

基本的特徴の分析

“ミニチュアの数”の平均 (*SD*) 個数は、学生群では55.0 (26.9) 個、臨床群では61.3 (28.6) 個であった。学生群と臨床群の使用するミニチュアの数に差があるか否かについて、*t* 検定による検討を行った結果、ミニチュアの数に平均値に関して群間に有意差はみられなかった。

“ミニチュアの種類”は、各種類において使用されたミニチュアの個数について、*t* 検定によって群間の差を検討した。その結果、種類別のミニチュアの平均値に関し、どの種類においても群間に有意差はなかった。また、各種類のミニチュアの数、全体のミニチュアの数に占める比率を算出し、群間の比率の検定を行ったところ、学生群は、臨床群に比べ、“人間系”と“建造物・人工物系”の比率が有意に高く、臨床群は、学生群に比べ、“動物系”の比率が有意に高かった (Table 2)。

“作品のテーマ”ごとに作品を分類し、群間の独立性を検討するために、Fisherの正確確率検定を行った (Table 3)。その結果、どの“作品のテーマ”にも群間に有意差はなかった。

イメージの類型の諸相

“イメージの類型”カテゴリーによる分類から、各群における、各類型の出現率を算出し、比率の検定を行なった。その結果、“外的イメージ”、“葛藤的イメージ”、“幻想的イメージ”の比率において、群間に有意な差があった。その比率から、“外的イメージ”、“幻想的イメージ”の比率は、学生群の方が高く、“葛藤的イメージ”の比率は

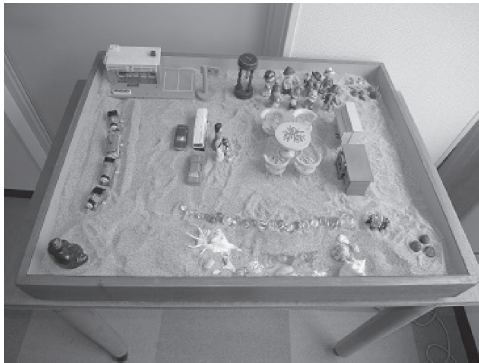


Figure 1 外的イメージの作品（女子学生）
注）説明の概要：“実家と住んでいる街。実家にあるピアノや畑、ゾウの置物を置いた。大仏も街にある。駅、コンビニ、バス停はAクリニックのすぐ外にあるから置いた。”



Figure 2 理想的イメージの作品（女性患者）
注）説明の概要：“住宅街。好きなように置いた。自分が住むんだったらこういうのがいい。完成された世界を作りたかった。”

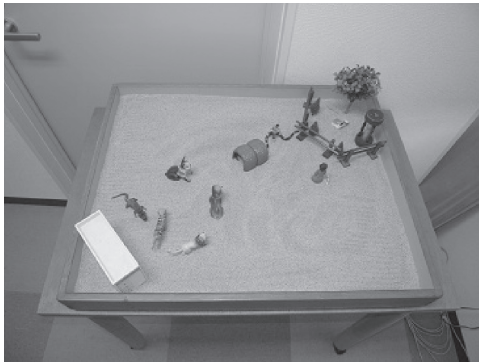


Figure 3 葛藤的イメージの作品（女性患者）
注）説明の概要：“自分には時間がない。自分の世界にいたいけど、働かなくてはいけない。でも、自分は飛べない鶏。柵の外には親がいて外に出てプレッシャーをかけてくる。それを乗り越えて社会に出て、肉食獣がいて、食べられてしまう。”

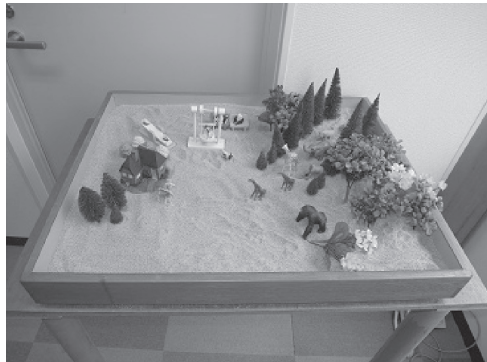


Figure 4 幻想的イメージの作品（女子学生）
注）説明の概要：“シカが家を建てたのでみんなが遊びに来る日。早く来たトリ達がシーソーで遊んでいる。麒麟の子どもは、嬉しそうに走り回っている。ゴリラは、内気でみんなと離れて暮らしていて、不器用な性格。でも、優しく、今日は花を贈ろうとしている。”

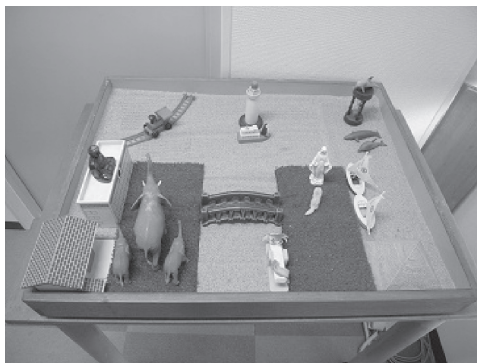


Figure 5. 抽象的イメージの作品（男性患者）
注）説明の概要：“別に何かというわけではないけど、印象的なモノを置こうと思った。芝が陸地で、砂が海とか。”

Table 2 ミニチュアの平均個数と比率の比較

			平均(標準偏差)の比較				比率の比較		
			学生群	臨床群	<i>t</i>		学生群	臨床群	<i>z</i>
植	物	系	14.9 (10.9)	15.0 (15.2)	0.06		0.27	0.24	1.88
動	物	系	13.9 (12.9)	20.1 (14.8)	1.60		0.25	0.33	4.86**
人	間	系	7.3 (6.5)	6.2 (5.8)	0.64		0.13	0.10	2.56*
建	造	物・人工物系	8.4 (5.5)	7.5 (5.8)	0.55		0.15	0.12	2.39*
交	通	系	2.4 (4.1)	2.2 (3.4)	0.19		0.04	0.04	0.00
そ	の	他	8.2 (11.8)	10.3 (11.0)	0.66		0.15	0.17	1.50
合	計		55.0 (26.9)	61.3 (28.5)	0.82				

* $p<.05$, ** $p<.01$

Table 3 作品のテーマによる制作人数の分類(人)

	学生群 ^a	臨床群 ^b
家・庭・公園	2	2
町・村	7	3
郊外・牧場	6	4
自然・ジャングル	1	3
つどい・おとぎの国	13	7
戦い	2	1
その他の	0	2

^a $N=31$, ^b $N=22$ Table 4 イメージの種類の比率^a

	学生群	臨床群	<i>z</i>
外的イメージ	0.40	0.18	2.13*
理想的イメージ	0.13	0.24	1.31
葛藤的イメージ	0.02	0.21	2.78**
幻想的イメージ	0.38	0.15	2.26*
抽象的イメージ	0.08	0.24	1.92

* $p<.05$, ** $p<.01$ ^a 複数のカテゴリーに該当する作品は、そのすべてのカテゴリーに分類した。

臨床群の方が高かった (Table 4)。

考 察

基本的特徴の分析

“ミニチュアの数”では、その平均値で群間に有意差はなく、制作者の不安の指標にはならないことが示された。ミニチュアの数、一般的には40－50個(木村, 1985)とされているが、本結果は、それよりも多く、臨床群は学生群より殊更であった。ミニチュア数は、種々の要因で増減するが、神経質傾向や、強迫的傾向は増加する一因と考えられている(木村, 1982)。本研究の臨床群は、その病像として、これらの傾向を有している。本結果は、これらの傾向の影響を支持するものと思われる。

“ミニチュアの種類”では、種類別の平均使用個数に関し、群間に有意差はなく、制作者の不安の指標にはならないことが示された。比率に関し、臨床群は、“動物系”が有意に高く、“人間系”、

“建造物・人工物系”は低かった。これは、不安が高いと、社会的で文化的なミニチュアの比率が低くなり、本能的でプリミティブなミニチュアの比率が増えると解釈することができる。臨床群の中には、対人不安や社会不安を感じる人が多く、箱庭においても、人間や社会に関連するものを避けるとともに、自我を際立たせる“動物系”の表現(Kalff, 1966 山中監訳, 1999)によって不安に対処したのではないだろうか。こうした一つのまとまりへの解釈には、解釈を重ねるほどギャップが大きくなることは、前述した通りであるが、大まかな傾向を捉えることは、実践における土台としての意義をもつだろう。

“作品のテーマ”は、群間に有意な関連はなく、制作者の不安の指標にはならないことが示された。総じて、従来の基本的特徴では、制作者の不安を判別する知見は乏しいことが示された。

イメージの種類の諸相について

臨床実践の知見では、箱庭作品は、自我と関連

が深く、自我の関与の程度が強いと防衛的な作品を作ったり、内的なものと関連が少ないものを作ったりすることが知られている（河合, 1969）。学生群に“外的イメージ”の作品の比率が高かったのは、自我が防衛的に働いた制作者が多かったためだと考えられる。スクリーニングを経た学生群は、総体的に高い自我の強さ（ego strength）を有していると考えられる。また、不慣れな場面において、自我のコントロールが強くなるのは自然な反応の一つといえる。“外的イメージ”の作品を制作した学生は、本研究の制作状況、すなわち、初めて訪れた精神科クリニックにおいて、面識のない筆者の前で、馴染みのない箱庭制作を行うという状況から、自我の適応的防衛（adaptive defense）が強く働いたものと思われる。その結果、作品は、内的な表現を抑え、外的現実と関連の強い“外的イメージ”になったと考えられる。

この他、学生群では、“幻想的イメージ”の作品の比率も高かった。これは、適度に退行できる自我をもった制作者が、学生群に比較的多かったためだと考えられる。不安が低い時、健康で自律的な自我は、自我による随意的統制下で、一時的な退行を可能にする。そのとき人は、創造活動や情緒体験が活発になり、自由な表現が可能になると考えられている（Kris, 1952 馬場訳, 1976；遠藤, 2012）。“幻想的イメージ”の作品を制作した学生の自我は、適度に防衛を弛め、退行的に機能し、内的活動が活性化し、想像性が高まった結果、“幻想的イメージ”の作品になったと考えられる。

臨床群では、“葛藤的イメージ”の作品の比率が高かった。箱庭には、その時、その人にとって問題となる面が出やすい（河合, 1969）。臨床群は、心身に不調が生じる程の困難があり、特性不安も強く、また、本制作状況における状態不安も強い。

“葛藤的イメージ”の作品を作った患者は、箱庭に強い不安を表現することで、不安の軽減をはかのように動機づけられたものと思われる。あるいは、

自我による統制の困難さから、自己の不安が箱庭に強く投影されたため、“葛藤的イメージ”の作品になったものと考えられる。

本研究のまとめと今後の課題

本研究は、箱庭作品の基本的な特徴やイメージの類型に関して、制作者の不安の観点から論じることを目的とした。学生群と臨床群の作品を比較したところ、“ミニチュアの数”、“ミニチュアの種類”、“作品のテーマ”には明確な差はなかった。“イメージの類型”では、制作者の自我機能が、防衛的であれば“外的イメージ”、退行的であれば“幻想的イメージ”、不安の強さと自我の統制のバランスが崩れると、“葛藤的イメージ”の作品になると考えられた。

臨床実践において、クライアントの不安の強さの程度を見立てることは、ケアにとって必要である。そして、それらは、箱庭療法では、制作者の自我機能や“イメージの類型”という観点から捉えられると考えられる。しかし、各類型における、作品の質、すなわち内的なものの関与の程度や作品の統合性は、個々に異なっている。そうした質の観点を交えて検討してゆくことが今後の課題である。

付 記

本研究の実施にあたり、箱庭制作にご協力してくださった皆様、ご支援してくださったAクリニックの精神科の先生をはじめ、二人の臨床心理士の先生、スタッフの皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Creswell, J. W. (1994). *Research design : Qualitative and quantitative approaches*. California : Sage.
- Coffey, A., & Atkinson, P. (1996). *Making sense of qualitative data : Complementary research strategies*. California : Sage.
- 遠藤 歩 (2010). “箱庭療法学研究” にみる箱庭療法学研究の現状 箱庭療法学研究, **23** (1), 97-104.
- 遠藤 歩 (2012). 箱庭制作者と評定者における状態不安と作品の印象との関係 心理学研究, **82** (6), 540-546.
- 古川壽亮・大野 裕・宇田英典・中根允文 (2002). 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究 平成14年度厚生労働科学研究費補助金 (厚生労働科学特別研究事業) 心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究協力報告書
<<http://mental.m.u-tokyo.ac.jp/h14tokubetsu/%E5%88%86%E6%8B%85%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B82-2.pdf>> (2011年 5 月 8 日)
- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・Spielberger, C. D. (2000). STAI マニュアル 新版 実務教育出版
- 弘中正美 (1987). 書評 “箱庭療法の基礎”・“箱庭療法—基礎的研究と実践—” 心理臨床学研究, **4** (2), 68-72.
- Kalff, M. D. (1966). *Sandspiel : Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche*. Zurich : Rascher Verlag.
(カルフ, M. D. 山中康裕 (監訳) (1999). カルフ箱庭療法 新版 誠信書房)
- 河合隼雄 (1969). 箱庭療法入門 誠信書房
- 木村晴子 (1981). 箱庭表現とロールシャッハ反応 ロールシャッハ研究, **XXIII**, 87-102.
- 木村晴子 (1982). 箱庭療法に関する研究——Y-G性格検査との関連—— 心理測定ジャーナル, **18** (2), 12-16.
- 木村 晴子 (1985). 箱庭療法——基礎的研究と実践—— 創元社
- Kris, E. (1952). *Psychoanalytic explorations in art*. New York : International Universities Press.
(クリス, E. 馬場 禮子 (訳) (1976). 現代精神分析 双書20 芸術の精神分析的研究 岩崎学術出版社)
- 宮川貴美子 (2004). 高齢者による箱庭制作の試み 箱庭療法学研究, **17** (2), 33-50.
- 岡田康伸 (1981). 箱庭療法に関する基礎的研究——年齢差を中心として—— 天理大学学報, **130**, 10-27.
- 佐藤修策・平松清志 (1987). 箱庭療法に関する基礎的研究——試験的12回面接による治療過程の検討—— 兵庫教育大学研究紀要 (第一分冊), **7**, 115-133.
- 清水将之 (1994). 医学臨床の主題としての不安 清水将之編 不安の臨床 金剛出版, pp. 9-20.